

令和5年度研究プロジェクト研究活動報告

研究種別	■自主研究 3	公益目的事業 16
主査名	板谷和也 流通経済大学教授	
研究テーマ	トラックと鉄道の結節箇所におけるコンテナ積卸しの効率化	
研究の経過（4月～9月）： <p>本研究では、鉄道コンテナ荷役における現状の把握、実務上の課題についてまず整理し、そのうえで門型クレーンの導入についての検討を進めることとしている。上半期にはまず改めて既存研究における鉄道コンテナ荷役の状況と門型クレーンの導入検討についての過去の実績について調査した。その結果として、門型クレーンについては国鉄時代の1970年代に複数の貨物ターミナルで実験が行われたものの、当時は採算および荷役のスピードの両面で、フォークリフトによる荷役の方が優位にあるとの結論に至っていたことが判明した。コンテナの大きさや架線の有無といった鉄道特有の要因の他、当時はフォークリフトを操作する人員が十分な数揃っていたということや、国鉄の大規模なストライキの後に急激に貨物取扱量が減少するといった社会的な要因もあり、東京ターミナルにおける実験設備が完成したのみで実験は中止となっている。</p> <p>またJR貨物に協力いただき、近年のコンテナ荷役と門型クレーン導入の可能性についてヒアリングを行った。現在の状況の下では、荷役の機械化・自動化による要員削減の効果が期待できるものの、設備投資規模が大きく、JR貨物として導入の予定はないということであった。これは、設備投資に必要な経費が確保できれば門型クレーンの導入は可能ということであり、輸送速度の向上や輸送品質の安定化にも寄与する可能性についても言及された。</p> 下期へ向けて（課題等）： <p>本研究ではJR貨物の協力が不可欠であり、この点について上半期は進捗した。ただし、鉄道貨物に詳しい学識者を研究メンバーに加えることが必要との指摘があり、現在、検討中である（鉄道貨物については、諸事情あり専門家の数が少ない）。</p> <p>今後の研究では、実現に向けた課題が主に採算性であることが判明しているため、コスト削減方法や補助を行う場合の予算規模等を明確にすることが必要である。このため、上記の学識者に加え、荷役を行う日本通運およびクレーンメーカー、省庁関係者等を招いて意見交換することを予定している。</p> <p>これらインタビューによる成果をもとに、現状の把握と導入可能性について報告書に取りまとめられる水準まで検討を行うこととしたい。</p>		